

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

日本消化器外科学会雑誌第 47 巻第 7 号をお届けいたします。早いもので、2014 年も既に後半の 7 月に入りました。本誌は原著 1 編，症例報告 6 編という構成です。

昨年 9 月に本学会誌の編集委員を拝命いたしました。他の学会の編集委員も幾つか務めていますが、本学会誌の特徴は、なんといっても日本一の邦文誌を目指して編集委員（＝査読者）が一堂に会し、すべての投稿論文の査読結果について熱いディスカッションをしていることで、他にあまり類を見ないのではないかと思います。査読結果を大勢の編集委員で検討することは、1 人では気がつかなかった論点を浮かび上がらせ、それだけ論文がブラッシュアップされる機会が多くなると切に感じています。査読にも自ずと力が入るといえるものです。ただ残念なことは、掲載論文の大多数が症例報告で占められているということです。最近では、有望な原著論文は英文で発表することが多くなっていますので、ある意味やむをえないことかもしれませんが、原著論文の少なさにやや寂しさを感じるのは私だけでしょうか。日本語で発表するのが特にふさわしい原著論文があるかどうかは分かりませんが、ぜひとも原著論文の投稿もお願いできればと思います。

ところでその編集委員会が 5 月からウェブ会議に変わりました。コンピュータの前で以前と同じような編集会議が開かれています。遠路からの移動時間や交通費が不要となり、非常に効率的になりました。何処にいても、たとえ海外でも、ネット環境とパソコンがあれば即座に会議に参加できるのです。ちなみに私は 1 回目を出先の病院から参加しました。ただ、まだ慣れない面があるからか、発言するタイミングが掴みにくい印象があります。隣の先生とちょっとこそこそ話、なんてこともできません。また職場で会議に参加すると、すぐに病棟や検査室から呼び出しがかかって中座を余儀なくされることは欠点かもしれません。だんだんと回を重ねるごとに、問題点や解決策が明確になってくるのだろうと思っています。

巷では 2014 年サッカーワールドカップブラジル大会が大詰めを迎えつつあります。予選リーグでは、我が日本チームばかりかアジア勢がすべて敗退し、勝ち残ったチームはヨーロッパと中南米のチームばかりです。ということで、一時ほどの盛り上がりはなくなりましたが、すばらしい試合が続いており、決勝戦が楽しみです。

（福島 亮治）

2014 年 7 月 1 日